

Middelfart 市 成人の知的障害者の住宅と日中活動の場

3 日目午前を訪ねたのはミゼルフアート北東部にある Vestbo の「共同の希望」(直訳)である。知的障害者の住宅と昼間の活動の場である

フレデリシアから海峡にかかる橋を渡るとミゼルフアートである。ミゼルフアートはリゾート地。通訳の木下さんが、「はじめてデンマークに来たのはここに留学したときであったが、学校長から『デンマークのハワイ』といわれた」という話を紹介してくれた。昔の港町の風情のある町並みも残っている。海洋動物のウォッチングの観光船も出ているとのこと。人口は 18000 人程度だったが、2007 年の自治体改革で近隣の 2 つの自治体と合併して 37274 人になった。

この市の中心部から郊外へとバスで約 20 分程度走ると畑の中に風力発電の風車が見えてきた。田園の広がるこの風景の中に Vestbo の「共同の希望」はあった。



Vestbo は 3 つの成人障害者施設の総称である。その中の一つがここ「共同の希望」で、成人 (18



歳以上) の障害者 22 名がそれぞれのアパートに住んでいる。ここから 12 キロ離れたところに 18 名、もう一つのところに 24 名が住んでいる。この 3 つを併せて Vestbo (西の住居) という。

2 年前までは女性の入所型の施設で、いま管理棟になっている黄色い建物に 22 名が住んでいたそう。そのときの部屋が 2 階に残されていて見学したが、現在より狭い部屋に 2 名ずつが暮らしていた。それでも日本の基準で考えると十分に広いと感じるのだが。同じ敷地内にケア付きのアパートを建設して、「入所施設」から「ケア付き住宅」に移行した。現在では男性の居住者もいる。



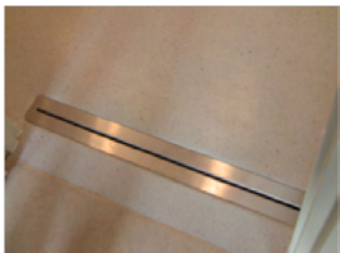
ここで生活している人は発達年齢 5、6 か月ぐらいから 8 歳ぐらいまでの成人。ことばを持たない人もいるので、アパートの入り口にはその日の予定が文字だけでなくイラスト (シンボルマーク) も使って掲示されている。

アパートの個人の占有面積は 35 平方メートル。各自の部屋は独立していて、それぞれに居間の部分と寝室部分を家具で区切っていた。そしてバ

ス・トイレが付いている。浴室の水を出しっぱなしにしてしまう人もいるので、居間に入らないように排水する仕組みも工夫されている。ベッド以外の家具は個人のもの。見学をさせてもらったアパートはたくさんの毛糸が置かれていた女性の部屋だった。編み物が好きなことがわかる。



ここでも特徴的なことは「共有」スペースが広くとられていることである。共有スペースには広い



キッチンとダイニングがあった。室外にも広いテラスがあった。住宅を建てるときには一人につき65平方メートルという国の基準があり、その中で個人の占有面積を増やせば、共有の面積が減る、逆に個人の面積を減らせば共有の面積を増やすことができるとのこと。

このアパートは住宅公団のものであるが、設計などは現場の意見を取り入れたて建てられた。共有部分についても調理器具などは備え付けだが、家具は利用者が用意したものだそう。居間には北欧らしいおしゃれなデザインの家具が備えられていた。



ただし、空室があっても住宅公団には家賃を納めなくては行けないので、なるべく早く入居者を入れなければならないとのこと。

次に日中の活動の場を見学した。

日中の活動はお金を稼ぐためのものではなく、自分のやりたい活動をするのだそう。釣りをする人もいれば絵を描く人もいる。社会見学に行くこともあるという。ここでは結果的に活動の成果物が販売されてお金を稼ぐこともあるが、それは活動の目的ではなく、その人が楽しむことが重要





とのことだ。さらに所長が強調したのは、「ここには高齢の障害者も生活しているが、高齢者のケアと違うのは、保護されるようなケアではなく、住居者の発達を保障するケアであることだ」とのこと。居住者・利用者のニーズは大切にしながら、発達という視点を大切にする職員の支援の姿勢をうかがい知ることがきる。

この日はボールを使ったゲームをみんなで楽しんでいた。隣の部屋には、絵を描くのが好きな居住者の絵が展示されていた。室内外にはトランポリンやブランコなどの遊具も設置されている。



ここでの活動を見学して考えたのは、日本では「経済的自立」にとらわれすぎていないかと言う

ことだ。「学校を卒業したら働かなければならない」という脅迫概念からなかなか逃れられない。障害の重い人にも働くことを追求してきた。それは個人の発達を促す側面ももっているが、ともするとお金を稼ぐことに偏重しすぎてしまうこともある。

こうしたことが可能なのは年金制度がしっかりとしているからである。若年者年金（障害者年金）は18歳から出る。その年金で、家賃や光熱水費、食費をまかなうことができるからである。



暮らしの場についての考え方も違っている。我々はともすると街の中で暮らすことに価値があると考えがちだが、ここでは住人が安心して生活するにふさわしい環境の中で暮らすことが重要と考えている。先日この中でサーカスも開催したというほど広大な敷地の中に住居と活動の場がある。ここにあるのは重度の知的障害の人たちの「住宅」であり、「日中活動の場」であるのだ。そしてその中で障害のある人たちの文化が育まれるのである。